

時を越える江戸の粹

清水弘

はじめに

江戸時代のわが国の花卉園芸文化は、全世界中でもっとも特色ある輝かしい一時期であったが、これは十八世紀半ばを境として大きく二つの時代に分かれる。

(1) 江戸前半期：江戸の大名屋敷や寺院庭園などの支配階級を中心にツバキ、カエデやツツジ、サツキ等花壇や地植えを中心とした造園用植物が注目され、それらに伴って植木屋や庭師などの専門業者が出現し園芸書の出版が始まった。

(2) 江戸後半期：フウラン、マツバラン等の小型植物や変化咲きアサガオ等を含む奇妙な形態の植物に注目、さらに世界に先がけて斑入り植物の価値を見出す等、広い敷地を必要としない鉢植えの草花園芸が庶民まで普及し、大衆の参加する花見行事や「連」と呼ばれる花の愛好者団体が誕生していった。私たちが愛でている花菖蒲というわが国独自の園芸植物も、こうした背景に生まれたものであ

る。殊に花菖蒲が時代の流れに消えないで現在まで生き残っているのは、梅雨時の花という観梅・観桜につながる季節感と一体化した花の美学と花菖蒲園という観光園芸の先駆的形態が成立し、そこで極めて多数の品種が保存されてきたことによる。

本会の成立80周年に当たり、中心役員の一人として花菖蒲の存在意味をもう一度確かめて、次代に繋ぐにはどうしたら良いかを花菖蒲の歴史を振り返りながら考えてみることにした。

花菖蒲の系統と歴史

1. ノハナショウブ（花菖蒲の原種）

わが国から朝鮮、東部シベリア、サハリンに自生するイリス属植物で、花菖蒲と呼ばれる園芸品種は、すべてこの一つの野生種から日本人のみによって改良されて来た世界に誇るべきものである。自生地によって多少形態もことなるが、葉も花も園芸品種に比べて小型で

草丈 90cm 程
度、花径 10cm
内外の赤紫色の花を数輪着ける。花

期は6月中旬から8月上旬で寒地ほど遅いが、東北以南では開花期がちょうど梅雨時にあたる。自生地の様子をみると、山地の池沼周辺や海岸湿地にしばしば群生しているのが、本来、水分を好むと考

えられるが停滞水は好まない。現在は都市周辺で見かけることはないが、東北地方を旅すると内陸盆地山際の湿地やそれに連続する水田や畦道、扇状地周辺に見ることが出来る。特に北海道東部にある大きな砂嘴や砂州の周辺湿地には、極めて大規模な群落が生じている。自生地により多少の変異があるが、一般的には亜種や変種等は認められていない。しかしながら、三好学は富士山周辺と箱根に自生するものは茎葉が細く、青味の強い花色であるため青紫色変種 (var. violacea) としている。実際に観察してみると、溶岩上の僅かな土壌に自生し過乾燥に耐えている状況にあり、他地域のものとはかなり違った性質をもっていることが分かる。富士・箱根地方から

出発して長野県境にかけては、この青紫色集団から普通の赤紫色の集団への移行帯となり、より北方では赤紫色の花を持つている集団が優勢となっている。現在の園芸品種と比較してみると、むしろ東京からより遠方にある東北地方の頑健な赤紫色集団との血のつながりを思わせる節がある。

2. 園芸品種成立（江戸前期品種群）

はつきりとはしないが、『拾玉集』に慈園（1155～1225年）という僧が「野澤瀉雨やや晴れて露をおもみ軒によそなる花菖蒲かな」と詠んだのを見ると、少なくともこの頃から花菖蒲が明らかに認められていたことが分る。一条兼良（1402～1481年）が著した『尺素往来』の中にも、花菖蒲が他の花卉とともに前栽に用いられていたことが書かれているが、恐らくはノハナショウブを觀賞したものと推定される。江戸時代になると寛文年間（1661～1673年）に尾張藩主徳川光友が江戸の屋敷戸山荘の庭に花菖蒲を植栽した記録がある。また、同時代にはいくつかの園芸書が出版されているが、わが国最初の園芸書といわれる『花壇綱目』（1681年）には、花菖蒲の色変わりや八重咲きが8種

程記載され、何れも旧暦5月に開花するとある。さらに有名な伊藤伊兵衛の『増補地錦抄』(1710年)には40品種があるので、この頃に花菖蒲が園芸化されたと見做され、これらは江戸前期品種群と呼ばれている。

江戸前期品種群が現代に繋がる花菖蒲の遺伝子プールとなっただろうかは、記録がないのではっきりという事は出来ない。ただ、花菖蒲に経済的価値がなかった時代に、その栽培・維持管理に労力を払ったとはとても思えないところから、ある程度、粗放的な栽培管理方法が取られたのではないかと推論される。1735年出版された『絵本野山草』には「花菖蒲に数百種あり書き尽くさず」との記載が出てくるが、これは今日見られるような改良品種ではなく、各地から集められたノハナショウブの花形に近いものが当時の江戸に集合していたことを物語るものである。嘗て、筆者は園長である春原弘氏に案内されて信州志賀高原にある高山植物園を見学したことがある。そこは近在の山地よりヒオウギアヤメの色変わりが収集され東館山山頂付近に移植されていたが、色変わり同士が自然交雑して、白色、淡紫、淡ピンク、淡紫

地に濃色筋入り等々の変異が拡大しているのを観察することが出来た。この例から考えると、恐らくは園芸ブームに沸いた江戸に持ち込まれたノハナショウブの変異個体が一定の場所に集中的に植栽されることによって自然交雑される。

それによって生じたより観賞価値のある個体を江戸人が選抜して行く。こういった過程で変異をどんどん集積して行き、変異遺伝子プールを拡大していったものと考えられる。花菖蒲などの多年性植物は株が長期にわたって生き抜いて行くという特徴があるので、原始的な親株保存園であり、且つ自然交雑種子がこぼれて実生が開花するような粗放的栽培園でもあるようなところでは、開花期に選抜された個体の中で交雑が行われ、その後代からまた選抜が繰り返される。これは一般的にいつて、交雑の頻度は低くても育種効率が良いとされる状態である。この江戸前期品種群の実態を示唆する資料が幸いにも残っている。1829年松平定信によって製作された『衆芳園草木画譜』で、牡丹、芍薬を始めとする当時の園芸植物を精密に描写した彩色画の中に、花菖蒲が⁴⁵品種程描かれている。松平定朝による後の改良品種と比べると、花

型は三英花と六英花の単純素朴な小輪ではあるものの、花色や花模様は現代品種に見られるものがおおよそ揃っている。つまり、花色、花模様といった特性についての改良が進んだことが江戸前期品種群の特徴といえる。

3. 粹な姿の江戸花菖蒲(江戸系)

花菖蒲が真に流行したのは天保・弘化(1830~1847)の頃からであって、それらは江戸後期品種群と呼ばれ、前期品種群とは年代の隔たりとともに系統的な関連も少ないように思われる。この後期品種群成立の過程で大きな役割を演じたのは、花菖蒲中興の祖と呼ばれる幕府旗本の松平定朝(菖翁)である。彼は父から受け継いだ花菖蒲の品種改良に専念し、不朽の名著である『花菖蒲培養録』

(1949年)を著したが、彼の作出した品種はそれまでなかった大輪であるという特徴を持ち現代品種と比較しても何ら遜色なく、その一部の品種は現在でも花菖蒲の代表的な品種として知られている。さて、江戸時代の花菖蒲の発達の史の上で、もう一つ特記すべきは天保末期の江戸堀切(現在の葛飾区堀切町)に最初の花菖蒲園であ

る「小高園」が開設され、花菖蒲という園芸植物が広く庶民に知られるようになったことである。この園では数代にわたって各地から新花を集めたり実生したりして品種を充実させていったが、その中には先に紹介した松平定朝の作出品種(尊敬を込めて特別に菖翁花とも呼ばれる)もあった。その後、花菖蒲の評判が広まるに連れて堀切地方にはいくつもの花菖蒲園が開設されたので、一層の品種改良が進んで、その品種の特徴が確立された。即ち、庭園用品種として改良されたので、風雨に耐えるよう茎葉が剛直で花は葉から抽出して開花する。花型は極大輪から野生に近い小輪までであるが、本来の形は花卉が水平に力強く拡がり(平咲という)、いかにも江戸っ子の威勢を誇示したようなものが多かった。

ところで、当時、江戸に住んだ人々の中に、「粹」という好みがあった。これは江戸のみならず、徳川時代の日本全体に行き渡っていた一つの趣味であり美のかたちである。その頃に活躍した松尾芭蕉は「西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の絵に於ける、利休が茶に於ける、その貫道するものは一なり。」といい、先人の歌

枕をたずねての旅に出た。いわばこの旅は、自身の中に鬱積しているマンネリズムや見てくれの模倣を切り捨て、物事の根底まで追いつめる旅であり、この旅の果てに見出したのは「軽み」という日本美であり、これは、そのまま「江戸の粋」にも深く貫いているものであった。

「江戸の粋」とは、徳川300年にわたる封建制度や鎖国による閉塞感に反発するものとして「粋」という美の世界が出来上がったものであった。当時の武士が長袴で決して上品といえないがさつな音をたてて歩いている野暮ったい姿から抜け出して、肌もあらわなさっぱりとした浴衣姿の町人の心意気を「いき」といい「すい」といったのである。私たちがたった今、呼吸している一息一息が本当の生きた時間であることを自覚した時、何事にも捕らわれない自由な感覚であるところの「いき」がわかるというものである。このような文化的な背景もあって、当時流行した花菖蒲の花型や色彩にも同様の美意識が浸透していったといえる。それは現在のホームセンターで販売されている園芸植物とは一線を画するもので、ちよつと見の美しさではなく、長時間の観賞にたえ

る飽きの来ない美しさの発見であった。これらは「江戸花菖蒲」と呼ばれているものであるが、その花々には浮ついた軽々しさはなく「粋」や「通」などが生まれた江戸ならではの美意識が今も宿っている。

4. 武士の嗜み、肥後花菖蒲（肥後系）

天保年間に肥後藩主細川斉護侯が松平定朝に花菖蒲の分譲を懇望され、その苗を熊本に送って改良させたことに由来する系統を「肥後花菖蒲」という。この系統の成立には「花連」と呼ばれる花の愛好家団体が深く関わっている。

定朝が花菖蒲の苗を分譲する時、「必ずこれを秘蔵し、みだりに分譲しないように」との条件をつけたため、細川斉護侯から栽培を委ねられた熊本城下の庶民の花の団体「花連」もその約束を固く守って門外不出とし、会員外には出さなかつたし新花の作出にも努力を重ねた。この「花連」は明治維新や西南戦争で組織が崩れたが、花菖蒲や菊、芍薬などでは花ごとにサークルをつくり、花菖蒲では有名な「満月会」が結成された（1888年）。満月会では以後、鋭い観察力に基づく品種改良を加えて、定朝

より分譲をうけた当時のものに較べて、飛躍的にすばらしい品種を作出し肥後花菖蒲と呼ばれるものを作つていった。この系統の特徴は、人の心に準えて花心（雌蕊）が立派（大きくて整った形）であること、花弁もこれに合わせて大きく互いに重なり合うほどに横にも広がっていること、葉性が強く花との均衡がとれていること等である。なお、これらは鉢植えとして室内観賞を目的に改良されたために鉢とのバランスはよいが、極大輪であるため風雨には弱く露地栽培には適さない。

5. 城下町松坂の伊勢花菖蒲（伊勢系）

紀州藩士、吉井定五郎（1776～1869年）が伊勢松坂で栽培を手がけたことから発達したもので、最初は松坂花菖蒲とあって珍重されたものである。江戸を中心に流行した花菖蒲は地方にまで普及し、先の肥後花菖蒲の系統は明らかに江戸花菖蒲に由来しているが、本系統もある程度、江戸花菖蒲と関係が想像されるものの両者の関係を示す明らかな記録は残っていない。同人は当時の熱心な園芸愛好家で某家に栽培されていた花菖蒲

を譲り受け、その実生から本系統を育て上げたといわれる。同人の没後はその長男吉井吉之丞に、さらに松坂の野口才吉、長林堅三郎、服部栄次郎、津の井関謙次郎、吉川万吉等に引き継がれ現在に至っている。特徴は草丈が比較的低く（70～100cm）、花茎と葉がほとんど同長となり鉢栽用向きに改良されている。葉幅が狭いものが多く花茎の分枝も少ない。花の大きさは中輪で三英咲きに価値をおいている。花弁は薄く互いに深く重なり合い垂れ下がるが、その下垂の仕方によつて、富士型、地蔵型、そして怒肩型の三つに分けられる。雌蕊の先端が鶏冠状に立ち上がつて、内弁と共に花の中心部を優美に飾っている。

6. 長井古種の発見（長井系）

昭和37年7月、日本花菖蒲協会の視察旅行会で山形県長井市のあやめ公園を訪れた際に発見された系統で、当時は江戸花菖蒲よりも更に古い時代の品種（江戸前期品種群）の品種ではないかというこゝでこの名が付けられた。発見当初は十数品種程が取り上げられたが、特徴としては、花型が野生種であるノハナシヨウブに極めて近く、花色は栽培品種に見られるも

の一通りそろってゐる。高性、垂葉のものが多く分枝性の強いものが見られる。根は比較的細いが根茎の分岐葉が良く、増殖性に優れている等の点である。この系統は1909年頃、地元の数名の風流人がノハナショウブを集め茶店を開いたのが栽培の発端というが、筆者がこの地域のノハナショウブを観察したところでは草状に長井古種との連続性が見られ、実際の変異個体(ピンク色)も発見できたことからこの話が裏づけられた。しかし、江戸花菖蒲より古い時代の改良種(古種)というより、ノハナショウブの変異種そのものといった方が適切と考えられる。花が小型であるため一輪をながめたときは物足りないが、数輪以上配置よく咲いた姿は大輪にはない清楚なよさがあり、ノハナショウブに近いだけあって露地植え栽培に極めて適している。

7. 花菖蒲改良の特徴

花菖蒲はわが国で独自に改良された園芸植物であることは言うまでもないが、花菖蒲を含むイリス属植物は北半球に約250種が分布しており、欧州では異種間交雑を中心として同じイリス属植物でもダッチアイリスやジャーマンアイリス等の改良が進んだ。他の日本

花卉でもそうだが、花菖蒲改良の特徴は種内交配のみにより、巨大輪性と花弁上の色模様、そして各種の花型を獲得したことである。経済的基盤をもった江戸園芸が成熟した江戸後期品種群についてみると、先に言った松平定朝の活躍が著しいが、彼が言うように親子二代でのみノハナショウブから菖翁花と呼ばれる高レベル度に改良された花をいきなり作出したとは到底思えない。当時でも、既

にかなり大輪となった栽培品種が存在していたところに、定朝の熱心な改良が加えられ花弁と花弁が重なり合うまでに丸弁化が進展したと推定される。また、現在まで残る彼の作出品種をみると、雌蕊が花弁から立ち上がる傾向にあると同時に雄蕊の花弁化が進み八重咲きが多く出現している等の特徴から、昆虫による自然交配に任せただけでなく、既に何らかの人工交配を行っていたのではないかと推定される。さらに、雌蕊が花弁から立ち上がり自然結実が少ない肥後花菖蒲成立にも、何らかの関係があるように思える。

松平定朝によって成し遂げられた花菖蒲の大輪性については、同じイリス属植物の中でも傑出した存在である。近代育種学からみ

ると四倍体の関与が疑われたが、富野耕治博士の広範囲の調査によって、花菖蒲の染色体はどれも通常の二倍体(2n=24)であったことから、この説は完全否定された。また、近年の藪谷勤博士の研究によると、花菖蒲の大輪性はNOR染色体の数の違いによる場合があるとの報告もなされている。

心を繋ぐ園芸文化

東京がまだ江戸とよばれていた時代、江戸は空前の園芸ブームであった。もともとは上方から押し寄せた園芸ブームであったが、当時の裕福な旗本は名譽と自己発露の場を求めて、園芸植物の収集や栽培、そしてその改良にと彼らの持てる時間と情熱を惜しみなく注いだ。花菖蒲中興の祖といわれる松平定朝もある程度の経済力をもった旗本だったようで、その品種名をみると漢語が多く使われ、名前一つつけるにも幅広い知識と教養が必要とされたことが分かる。当時の園芸世界は武士のほかに町人まで広がっていたが、趣味としてはいいながらも、選ばれたものだけが参加できる世界であり、プライドの高い旗本達を夢中にさせ、なまじの植木屋より園芸の専門家と

して大成した多くの人物が誕生した。また、当時の江戸ではいろいろな園芸植物で花合(花の品評会)が行なわれたが、やがて熱心家が集まって「連」と呼ばれるサークルを作った。もちろん当時は身分階級のはっきりした封建社会であり、このサークルの中にも身分に上下ある人たちが混じっていたが、この中では差別のない組織的な活動をしていた。

現代の日本社会でもガーデニングという言葉が広まり、江戸時代と似たような状況となっているが、何時の時代も美しい花を見ると私たちは感動し、その永遠を願うとともに、それを手元に置きたくなるものである(栽培)。また、道行行く他人がそれを見て美しいと思ひ、感動の輪が次第に広がって行く。そういう人たちの中には、さらに美しい姿の花を作り出したと思ひ新しい品種を作り出すまでに至る人も出てくる(育種)。そうして生まれた品種の中ではその時代社会の好みにあったものが流行するが、世相が変わって行くことやがて世間から遠ざかって行くのが一般的傾向である。(品種の変遷)このようにして成立してゆく園芸植物を文化財といってもよいのではないであろうか。